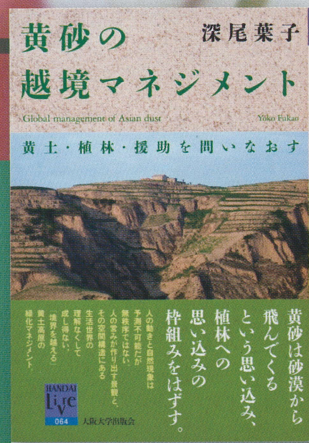


黄砂の越境マネジメント 黄土・植林・援助を問いなおす

深尾 葉子(昭・60卒)



環境問題は、技術的な問題、法律的に解決すべき問題、あるいは「責任論」で問いたさすべきものである、と考えられがちである。しかし、「環境問題」は人間の問題であり、集団としての人間の精神の作動の問題である。そこに解決の困難さもあり、また解決の糸口もある。

これは本書の「はじめに」の一文をそのまま抜き書きしたものである。さらにその冒頭の文章は以下の文章へと続く。

環境問題は、人間が限定された認識の範囲の学習から、自らの行動をつくりだし、その物質的影響が周囲におよぶ時に発生する結果に対して、フィードバック回路が閉ざされているとき、深刻化する。すなわち人間の認識が捉える範囲を逸脱した問題について、学習回路が開かれていない時、それは「環境問題」として我々の前にたち現れるのである。

私が大学を卒業し、その二年後修士修了と同時に外大の助手として母校に戻り、その3年後の1990年に初めて黄土高原を訪れて以来、はや30年の月日が経過した。そしてその第一回目の旅でかねてより訪れたいとひそかに思っていた米脂県

楊家溝村に偶然の縁でたどり着き、今日に至るまでほぼ毎年夏の数日間をその村の窑洞で過ごしている。外大に職を得たことも多くの偶然が重なった幸運であったが、一方年間を通じて授業による拘束が非常に長く、また負担も重い外大での教員生活は、当初思い描いていたフィールドワークを主体とする研究スタイルを、夏のごく限られた時期にのみしか行えないという状況へと導いた。結局、一年に滞在できる期間は限られているため、年数を重ねることでそう滞在時間を確保するしかない、という考えで、細く長く続けることとした。

黄土高原調査の前半は主として民間芸術関係者とのつながりの中で、日本での黄土高原芸能の公演や文化交流、また村の人々の廟会や芝居に取り組む熱意と彼らへの参与観察のプロセスが主流を占めていた。その後2000年前後から、今度は村をめぐる環境問題、村の生活と生態系の変化の相互作用、村と村をとりまく世界での情報伝達とそのコミュニケーションの特性が、この地域の社会の特徴を形成しているという点について、これも参与観察、あるいはさらに進んで参与

被観察(参与し観察される)されるという手法で明らかにしようとした。参与観察は人類学者がフィールドワークを行う際、客観性を担保に、外部的に記述するのではなく、自らがそこに参与してそこから見える社会を記述する、という方法を指しているのだが、参与被観察は、さらに進んで、調査者は観察する主体であると同時に、観察される客体でもある、という視点を取り込み、自らが参与し、その社会から観察され、評価されるプロセスをも記述の対象とする、という方法を指している。「参与被観察」は私の造語だが、人々をめぐる噂話の大好きな同地域では、常に、参与することによって観察される、という視線を感じており、それを表現した。またもう一つ我々の行っていた調査の手法として「確信犯的いきあたりばったり」という言葉も用いているが、計画通り調査をしようとしても常に現地状況に攪乱され、思い通りにはゆかないばかりか、あらかじめこちらの予見によって立てた「計画」に沿って行おうとすることそのものが、すでに一定の価値基準を伴っており、観察する対象をゆがめてしまうため、あえて対象社会のうねりの中に身を任せ、対象社会の律動とテンポに取り込まれつつ、その社会が見せてくれるもっとも面白い動きの中に、「巻き込まれてゆく」こと、その巻き込まれるプロセスを記述することを表現している。つまり、調査はきわめて「いきあたりばったり」的に行われるのだが、それこそがこちらの狙いであり、「確信犯」である、という意味だ。これらの手法は黄土高原で意のままにならない調査や、何十年にもわたって対象社会のリズムに振り回される調査というそれ自身の意味を読み解くこと事態が難しいプロセス

の中で思考し、言語化していったものであり、そこで学んだ生き方、行き方が、私自身の日ごろの生活や学問や仕事にも反映されるようになった。

よく私自身の調査に、日本人の学生さんや社会人の方々を一緒にお連れし、その「波乗り」のような調査に同行してもらうことがあるのだが、参加された人々は一様に、「何が起きても驚かなくなりました」とか「予想外におきることを楽しめるようになりました」といった感想を漏らされる。それを聞いたときに、私は「あ、この調査はうまくいったんだな」と思うことにしている。

実はこういう思考の訓練がそのまま本書で描く「黄砂の越境マネジメント」を貫く手法となっている。あらかじめ予見に囚われて対象をみている時には気づかなかった事柄や、理解できなかった出来事が、予見をとりはずしたり、あるいは予見があったことに気づいて改めて見直すことによってはじめてその意味が理解できたり、新たな枠組みが立ち現れたりする。対象を認識する、というプロセスは常に、自分自身の枠組みを取り外し、その枠組みの外側にある事象を認識し、言語化し、そこから学んで新たな枠の組み換えを行うこと、を含んでおり、それこそが「学習」であり「学問」の過程である。そういう目線で、現地で観察した「黄砂」「黄土」「援助」「植林」などを読みかえると意外な事実が見えてくる、それを一つ一つ思い込みからの離脱というプロセスとして示したのが本書だ。

たとえば、「黄砂は砂漠から飛んでくる」、「黄砂の舞い上がる環境を改善するためには植林をすることが正しいことだ」、あるいは「舞い上がる黄砂は大気を汚染する源となり人類に害を与えるの

で、舞い上がりを防止すべきだ」という、我々が
一見正しいと思いがちな、予見が実は環境
破壊を逆に進めていたり、生態系の回復を遅らせ
る結果に結びついたりしている。環境問題とい
うのは人類が関り、人類に影響の及ぶ自然界の
反応を指すが、それに取り組むには、自らが引き
起こしている行為の連鎖がどのように環境と相
互作用してどのような結果を生み出しているの
か、自らの予見から逸脱し、目の前に起きている
ことから学び、枠組みを問い直すことによって
「知る」という過程を必然的に伴う。そのことを一
連の練習題として提示することで、人類が決め
た「境界」を越えて発生する「環境問題」さら
には、自身の学問的領域という「境界」を越えて
発生する問題、さらには自己の認識の枠組みとい
う「境界」を越えて発生している事象を理解する
第一歩となることを企図したのが本書である。
それは自らの「愚昧」を脱する試みの連続を記
述することでもある。

大阪大学新キャンパスはあと1年半で箕面船
場の新キャンパスに移転する。その新しいキャン
パスのホールに各国言語で何か言葉を石に刻む
ことになり、中国語は以下のものを提案した。

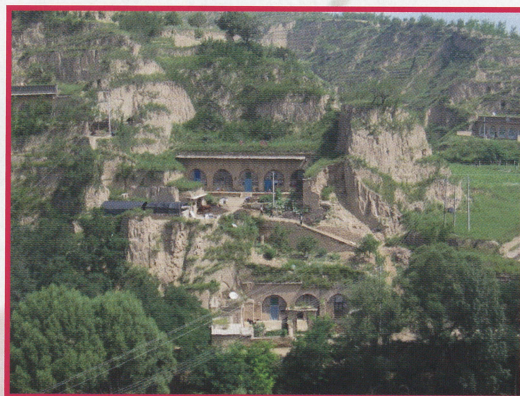
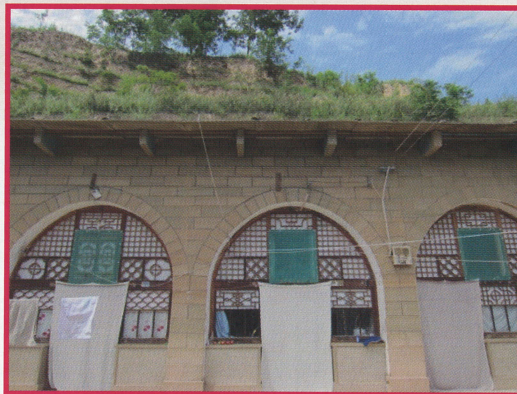
欲誠其意者 先致其知 致
知在格物 物格而後知至

これは『礼記』大学篇からの一節であるが、一
般に「格物致知」という四字はここからとられたも
のである。その意味は、「意を誠としたいと欲する
ものは、まずその知を致せ。知を致すということは
格物にある。格物の後に知に至る」というもので、
この石板の告示の解説としては字数制限の都合
で「物の理を極め、精神を正すことで知に至る」と
のみ訳した。ここで最も難しいのが「格物」である
が、これは、その字の通り眼前にある事物と格闘
し、実際に四つに組んでその事物の理を読み解く
ことを意味している。

ちなみに香港大学の校訓は「明德格物」であ
るが、その意味は「徳を明らかにし、物の理を極
める」で、宋代の儒学者朱熹の解釈によれば
「致知」とは知識の領域を出来得る限り拡大す
ることを意味し、「格物」は事物の原理を探求す
ること、としている。つまり本書でいうところの対
象と四つに組んで取り組み、フレーミングの外に思
いを致し、枠組みの外の事象を感じ取り、新たな
知を獲得する、という作動はまさに、この「格物致
知」の示していることであつたのだ、とこの刻字の
内容を選ぶ過程で改めて知った。言い換えれ
ば、中国の黄土高原において30年にわたって
格闘してようやく言葉にしたことは、今から2千年
以上前の中国の書物にすでにとくに記されて
いたことであつた。

そんなささやかな知的営為ではあるけれど、外
大で中国研究の道を知り、フィールドで学ぶとい
うことを志した時から40年もの時を経て、ようやくそ
の成果が遅ればせながら少しづつ形になりつつ
ある。その第一歩が本書であり、今後も少しづつ

形にしてゆきたいと考えている。旧外大の諸先輩方や、同学の皆さん、後輩の皆さんもぜひ、沿海地区や都市部では感じられない中国の姿を見にいらして下さい。夏の窯洞の生活は想像以上に快適です。今年も総勢15名の現役学生、院生、そして同僚の先生方とともに黄土高原、オルドスに足を運びます。今や交通も便利になって上海経由ないしは青島経由でその日のうちに村に入ることも不可能ではなくなってきているこの村の窯洞から現代中国の変化と変わらぬものを感じ取っていただけたらと思います。



黄砂の越境マネジメント —黄土・植林・援助を問いなおす(2019年 咲耶出版大賞受賞)

著者：深尾葉子 出版：大阪大学出版会 発行：2018年9月9日 価格：本体 2,300円+税